

経営者は、経営面でも私生活でも大きな決断を迫られることがあります。その一例として、設備投資や社屋建設を行なう際の借金が挙げられます。今号は、倫理運動の創始者である丸山敏雄の事例を通じて、借りたお金の後始末について学んでいきます。創始者は終戦前後にかけて、三菱重工業の常務取締役であった原耕三氏との縁で、仕事も住まいも三菱重工業に世話になったことがあります。

昭和二十二年四月二十一日、原氏から書簡が届きました。内容は、敗戦の痛手から人員整理の必要に迫られ、退職してもらいたいというものでした。それに伴い、引越しの準備が整ったら社宅を出てもらいたいという要請も含まれていました。

創始者は八月十六日に原氏に挨拶に伺い、その際の会話から実践の重要性を痛感します。日誌には「夜、家族にも、その由を告げ、実践にかかる。正面の門より本館までのところの掃除をなす」と記されており、ここから徹底した社宅清掃を行ないました。とはいえ、引越しをするにも資金面で苦しい状況にあり、創始者は他人から借金をすることをためらっていました。しかし、妻のキク夫人の説得もあり、借金を決意し、本格的に新たな住まいを探し始めました。終戦後の住宅難の中、探し続けた結果、昭和二十二年八月二十五日に「新世会」（倫理研究所の前身）が結成され、創始者の終の棲家である高杉庵の購入が決まりました。その際、資金面で援助を受けた十二名の



創始者の実践から学ぶ 金銭の後始末と心構え

名前が並ぶ借用書を九月八日に作成しました。借用書には、この借金を人のため、世のために活用すること、融資者が必要とすればいつでも返済すること、返済が困難な場合は蔵書数万冊を売却して返済することなどが記されています。ここに、創始者の「借りたものは必ず返す」という決意と信念が表われているのではないのでしょうか。その後も創始者は質素節約を貫き、当時は貴重だった反物を添えて返済したのでした。ところが、最後に大分県で大分バスを営む佐藤恒彦氏への借入金だけが残り、創始者もそれを心残りに感じており、最晩年に体調を急激に崩しながらも、執筆作業の合間にキク夫人に「用意はできたか」と何度も確認していました。そして、昭和二十六年十二月に返済の準備が整うと、佐藤氏に完済しました。それを誰よりも喜んだのは創始者自身でした。

最後の日誌には、佐藤氏に宛てた書留の証明書が貼られています。キク夫人はこの証明書について、「私にしてみれば、涙なくしては見られないものです。最後に主人が喜ばれた記念品ですから」と振り返りました。その後、完済から三日後の十二月十四日に丸山敏雄は逝去しました。

以上のように、創始者の金銭の後始末の姿勢には、誠実さや責任感など学ぶべき点が多々あります。私たちも、会社のためだけでなく、地域や他者に貢献するという信念、完済するという決意、そして融資してくれた先への感謝を大切にしたいものです。